
韓国のスポーツ・ナショナリズム

Sport Nationalism in South Korea

土佐 昌樹
Masaki Tosa

Abstract:

Sport nationalism means complex social phenomena created by the connections between nation-state and sport. It reflects and creates collective solidarity of the state, and at the same time presupposes and constructs the trans-national ties. The national victory in any international game is usually reported by the media with great enthusiasm; there is no other social institution than this which visualizes nationalism in such a dramatic way. Journalism is fond of this topic, but its academic investigation has just begun.

The East Asia including Japan, China, and South Korea is an appropriate locus for this quest. In the past decades, China and South Korea have showed the conspicuous performance in the Olympic Games and other international sport competitions, as the results of the long term policies that have exploited sport to propagate national prestige. Japan, stimulated by their “success”, has also started to appreciate the significance of sport policies in the national strategy, and settled on to install the Sport Agencies in the government. The endeavor to understand such movements in a comparative way will provide a great hint for real measure of peace keeping in the region where nationalistic enthusiasm easily gets escalated.

This paper examines the history and characteristics of sport nationalism in South Korea as a step for comparative study in East Asia. I will focus my attention to media, postcolonial history of policies, and the ritual dimension of sport.

The Korean government has sought triumphalism brought by the intensive strategy with centralized training system, elitist competition, special bonus for prominent results, etc. Thus the great performance of national athletes will be rewarded with honor and wealth. Nationwide enthusiasm promoted by media creates nationalistic solidarity, which can be scarcely found in daily contexts. Sport has been a special tool to achieve special political aims, such as prevailing the anti-communist and anti-Japanese competition. But recently, as the Korean society becomes more affluent and matured, people begin to enjoy the appeal of sport per se. The mega sport event including public viewing presents a typical scene of Korean nationalistic enthusiasm, but it is also a good example of ritual consumption and the development of sport as art. Sport nationalism should be considered in such multiple dimensions.

Keywords : nationalism, South Korea, sport, media, policy

キーワード：ナショナリズム、韓国、スポーツ、メディア、政策

1. なぜスポーツ・ナショナリズムが問題になるのか

スポーツ・ナショナリズム (sport nationalism. 以下、SNと略記) とは、国民 (民族)・国家 (nation-state) とスポーツとの結びつきがもたらす複合的な社会現象を指している。それは、国家の集団的連帯を反映／実現し、同時に国家を超えた結びつきを前提／構築する。国や地域を問わず、国際的な競技大会における自国の勝利は熱狂的に報道されるのが常であり、ナショナリズムをこれほど可視化する社会制度は他に見当たらない。普段は見えない「ネーション」との絆が顕現し、熱狂とともに「われわれ」の実在が集団的な記憶として刻み込まれる。宗教、性別、年齢を超えて「同じ国民・民族」として大衆が目に見える形で集まる機会が、これ以外にあるだろうか。趣味・嗜好とメディアの分散化が進む今日、スポーツより国民を一体化するメディアは存在しないといえるかもしれない。こうした顕著な現象であるにも関わらず、社会科学的な考察や分析は目立っていない。ジャーナリズムではたびたび取り上げられる話題ではあるが、この問題に対する学術的な研究はまだ緒に就いたばかりといってよいのである*1。ナショナリズムそのものが多くの議論を呼ぶ難題であるが、ここではスポーツとの結びつきに議論を限定し、そこに多層的な問題の広がりが含まれることに注意を喚起したい。

このテーマを追究するにあたり、日本、中国、韓国などからなる東アジア地域は、恰好の「場所」であり、多くの興味深い事例を提供してくれる。2008年の北京オリンピックで中国が金メダル獲得数で世界一位に躍り出たが、人口あたりでいえば韓国の方が世界有数の位置にある。オリンピックをはじめとする国際競技大会において、中韓の活躍には近年めざましいものがあるが、両国とも政策的に国威発揚の手段としてスポーツを積極的に利用してきた成果である。スポーツとナショナリズムの結びつきは、一般に「遅れた」現象と受けとめられる傾向が強いが、東アジアの現実を見るとそう簡単に片付けられる問題でないことが知れる。そうした「成功」に刺激され、日本でもスポーツ政策を国家戦略のなかに位置づけ、「スポーツ庁」設置や「スポーツ立国戦略」の策定などが現実化しつつある。そうした動きを比較的な視点から捉え直す試みは、ナショナリズムが激化するこの地域の平和的共生にとって現実的処方箋を描き出すときの大きな手がかりを提供するであろう。

本稿は、東アジアの比較研究を意識しながら、韓国の事例について考察する。その歴史的特徴を概括し、メディア、政策、儀礼的次元からその機能と象徴性について分析を加え、比較研究に向けた全体的な見取り図を描くことが目的である。執筆にあたり、文献資料だけでなく関係者に対するインタビューが大きな参考となった*2。

2. メディアとSN

国際ゲームで韓国の選手やチームの活躍が期待されると、報道の熱狂ぶりはただならぬ水準になる。そうした傾向は、知りうる範囲で見ても基本的にどの国でも大差ないともいえるが、印象論を超えた比較研究が見当たらないのも事実である。ここでは、将来にむけて韓国の例をできるだけ具体的に考察することを目指したい。

ケーススタディとして、2009年3月におこなわれたWBC (ワールド・ベースボール・クラシック) を韓国のスポーツ新聞4紙 (『スポーツ朝鮮』『スポーツ・ソウル』『スポーツ・カン』『日刊スポーツ』) がどのように報じたかを記述、分析してみる。この例を取り上げるのは、野球はサッカーと並び韓国で最も人気のあるスポーツであり、また世界の頂点に立つ可能性の高い競技でもあるからだ、

たまたまこの時の主要スポーツ新聞にくまなく目を通すチャンスにめぐまれたという偶然にも負っている。

準優勝の成績を上げた韓国の活躍は、国際的な舞台で（予選を含め）日本と5度にわたる戦いを繰り返し得る機会を得て、特別な国民的興奮を呼び起こした。決勝戦の報道には、あらゆる形容詞が踊ったが、大ざっぱに言えば次の5種類の修辞が際立っていた。

①賞賛と祝福。最も目立つのは、自国のチームを過剰なまでに称える表現である。「よくやってくれた」、「未来はさらに明るい」、「皆さんが真のチャンピオン」、「惜しいが見事だ」、「限りなく誇らしい」、「偉大なる」、「若い血がやり遂げた」、「優勝より光った」、「痛快」、「希望を放った韓国野球」、「美しい準優勝」、「おかげで幸せでした」等々。こうした表現の氾濫は、スポーツを宗教的恍惚や民族的讃歌の高みにまで引き上げずにはいない。

②一体感の強調。チームの結束力には、国民全体の結束を導く象徴的位置が与えられる。「一つになる」、「一丸となる」、「テハンミングック（大韓民国）」といったフレーズが連呼される。ゲームが衛星中継されているというだけでなく、全国民がそれに没入したという「事実」が強調される（「全国のあちこちで国民の目と耳はTV画面に集中した」、「大韓民国が野球に溺れた」）。ひとつのゲームが国家的・民族的連帯を代表するかのような修辞は、監督の「国家があり、野球がある」という鼓舞的表現と固く手を結びあっていた。

③好戦的・軍事的隠喩。「太極戦士」、「制覇」、「作戦」、「世界征服」、「版図再編」、「大長征」、「血闘」、「撃破」、「血のたぎる」、「焦土化」、「闘魂」等々。スポーツそのものにこうした隠喩を呼び寄せる特性があり、男性性をあからさまに鼓舞する修辞が乱舞するのは、世界中のスポーツ紙に共通して見られる傾向であろう。しかし、日本と比べても韓国のスポーツ紙には、そうした表現が明らかに多用されている。

④経済効果。今日の世界におけるスポーツの社会的意義を考えると、ビジネスとしての側面はますます重要になってきており、スポーツ紙の報道にもそのことが強く反映している。「不景気を吹き飛ばす」といった経済効果を測る記事や、視聴率の分析、さらには職場でのテレビ観戦が増えたためにコンビニの弁当や飲み物などがどのくらい売りを伸ばしたかといったリサーチも目についた。

⑤敵意。自国チームにたいする肯定的感情の裏面に、相手チームにたいする敵意がある。しかし、日本にたいする否定的感情が比較的ストレートに表現される韓国でも、今日のマスメディアがあからさまな敵意や憎悪を鼓舞することは実はまれである。たとえば、「日本特有の分析野球にやられた」といった解説的表現や、「今度はフィギュア韓日戦だ」、「日本、これからは韓国を見くびることはできないだろう」といった程度の対抗心が表現されるにとどまる。一方で、日韓ともにネットでの発言には無責任で侮蔑的な表現が目立つのも事実である。そこで、ネットでの「あざけり半分の書き込み」を引用する形で、それが「国民感情を代弁」していることを示唆する記事くらいは見ることができる。ちなみにこの大会では、マリナーズのイチローの挑発的発言（「むこう30年は日本に勝てないと思わせるような勝ち方がしたい」）が韓国では繰り返し報道され、感情的反発を呼んでいたが、最終的には決勝打を称え、「憎らしいが強かったイチロー」といった評価がなされていた。以上のような特徴が凝縮してあらわれている例として、「[「テハンミングック」の合唱の中で一つになった僑民]」（『スポーツ・ソウル』2009年3月25日付）という記事を見てみよう。

24日、決勝戦が繰り広げられた米カリフォルニア州ロサンゼルス市はすべて青い波で覆われた。近郊都市まで含め、約100万名（推算）の韓人が集まって住む米州韓人の中心都市LAは、この日、韓国チームの善戦を祈願する僑民たちの熱気で熱く焼けた。

決勝戦が繰り広げられたドジャースタジアムには、苦勞して入場券を手に入れた僑民たちが席を埋め尽くした。入場券を手に入れられなかった人たちは、ゲーム開始3時間前から市内の食堂と、外部スクリーンを設置した僑民施設の前に集まった。LAを中心に発行されている『スポーツ・ソウルUSA』の集計によれば、この日、応援のためにドジャースタジアムを訪れた韓国人はおおよそ4万名であり、全5万6千余りの観覧席の大部分を占領した。大韓民国野球サポーターとして青いユニフォームを着て、市内各地に散らばった「青い妖怪」はおおよそ30万～40万名に及ぶと推算された。

…『スポーツ・ソウルUSA』ソン・ゴニョン記者は、「たまたま惜しくも準優勝だったが、LA韓国人社会がこれより熱狂的なことはなかった」といい、「韓国代表チームの善戦でひびきに韓国人社会が一丸となる契機になった」と意味を付け加えた。LAに住むユン・ジニョン（41）氏は、「決勝戦の勝敗を離れ、僑民たちは日本で開かれた一ラウンドから感動の勝負を繰り広げてきた韓国代表チームを通じ、甚だしい不景気の沼の中で活力とエネルギーをもらった」と語った。

ここには、アンダーソンのいう「遠隔地ナショナリズム」が典型的にあらわれている。ディアスポラにこそより「純粹な」ナショナリズムが降臨するという傾向は歴史的に韓国のナショナリズムを特徴づけてきたが、ファックス、ビデオテープ、DVD、インターネットといったメディア技術の発達により、本国と遠隔地はますます緊密に結ばれるようになった。そこには、現実から離陸したメディアをもっぱら頼りとすることで、本国より観念的で純粹な「民族意識」が培養される条件が出そろうことになる。

アンダーソンは、19世紀イギリスの政治家・歴史家のアクトン卿を引きながら、ナショナリズムは「故郷離脱エグザイルから生まれる」という事実を強調している*3。

ナショナリズム運動が起こり、さまざまな変遷を経て成功した国民国家へのし上がっていく過程は、離散の地から故郷に戻り、雑種性を解消し、政治闘争という暗室で陰画を反転させて陽画の写真を現像するための企図である。

この要約は、ハワイから「帰国」した李承晩が初代大統領となり、植民地解放から建国と国家運営へと至る韓国の事例にもほぼぴったり当てはまる。だが、こうした捉え方もすでに時代遅れといえる面がある。メディアのさらなる技術的発展とグローバル化は、一直線に本国と離散の地を結ぶというよりは、サブカルチャー化やメディアの分散化という現象を引き起こしている。また、本国との関係も、離散と帰還という二極分化したものであるよりは、もっと便宜的で拡散的な方向へと向かっている。

「本国」でも、実はすでに大部分の「現実」はメディア化されており、さらに衛星放送やインターネットといった最近のメディア技術は本国と外国との距離と時差をほとんど無化してしまった。

この問題は、SNを考えるときに決定的に重要と思われる。今日の観客は、スタジアムの「生の」現場に立ちあいながらも、わざわざラジオの実況中継に耳を傾けたり、巨大スクリーンで決定的瞬間のリプレーをつい期待せずにはいられない。中心に「真の現実」があり、それがメディアによって徐々に薄められつつ遠隔地へと運ばれていくのではなく、メディアを通じた「現実」こそが今や距離を問わず知覚と行動の様式を決定づけているのである。

たとえば、サッカーでは観客は「12人目のプレーヤー」と呼ばれ、ファンの熱狂的な応援は実際にゲームの行方を左右する力があると見なされている。しかし、同様の（あるいはそれ以上の）熱狂的な応援の風景は、今やスタジアムの外でもありふれたものとなっている。それが職場や家庭のテレビを通じた分散の風景でなく、パブリック・ビューイングとして世界中で公認化されつつある。韓国では、巨大スクリーンを祭壇にしたメガ級の社会的イベントになったのが2002年日韓共催のWC（ワールドカップ）からであった。ソウルの市庁前広場から光化門に至る大通りに膨大な数のサポーターが集まる様子は、世界中で驚きとともに報じられた。さらにソウルだけでなく、そうした「街頭応援」の風景は、全国各地で見られた。警察庁の集計では、イタリア戦では420万人、スペイン戦では500万人が繰り出した。ピークとなった準決勝のドイツ戦ではソウルの市庁前に80万人が集まり、総勢700万人の群衆が全国各地の通りを埋めつくしたとされる。

これは自発的な行動ではあるが、メディアを意識した「演技」であり、またメディアに演出されたメディアイベントでもある。典型的な流れはこうである。ゲームの始まる何時間も前から同じ赤いユニフォームをまとい、国旗のペイントなどで「仮装」したサポーターが押し寄せてくると、一帯の交通は遮断される。老若男女を問わず一堂に会し、特に若い女性が多いことが知られている。「テーハンミングック」を連呼し、銅鑼、太鼓、ラッパなどスタジアム以上に多様な道具で騒音を鳴らし、祝祭気分を盛り上げる。どれほど騒いでもゲームに影響を与えることはないはずだが、彼らはゲームが始まるとその行方に集中し、歓喜と絶叫を繰り返し、異常な密度で集まった群衆との一体感をおぼえる。その場にいるだけで、意識が液状化し、集合意識としてひとつに溶けあうかのようだ。

日常生活では決して味わうことのない、また世界的に見ても突出した規模と密度で（あえていえばメッカの情景に近いだろうか）、膨大な数の人間が「ひとつになる」という聖なる瞬間を経験し、ゲームが終わるとまた日常へと静かに戻っていく。スタジアムの外でおこなう集団応援は、見返りを要求しない、神に対する祈りに似た風景なのである。

一見すると群衆の無秩序も暴力もなく、排他的なナショナリズムでもないこの自然発生的なメガイベントは、健康で明るいマスゲームのようなものとして韓国では肯定的に捉えられた。韓国チームのサポーターは、服装から赤い悪魔と呼ばれ、そこからきた「R世代」という言葉は、ネクラな「N世代」（ネットに依存した若者）にたいして韓国の新たな若者気質を代表するものとなった*4。

こうして具体的に記述すると、その過剰な修辞や集団の熱狂が際立つのであるが、メディア全体が同じ姿勢を共有しているわけではない。解釈を相対化するために、2011年9月にKBS（韓国放送公社）のスポーツ記者、キム・ワンス氏にたいしておこなったインタビューの一部を紹介しておこう。

KBSでは、最初から入社の際にスポーツ専門記者として採用する。昔は専門記者がいなか

ったので、2002年のWCを契機に組織改編をした。外国語能力、スポーツにたいする関心、体力を主な基準にして特化している。内部は、プロ、体育会など6つのセクションに別れ、2年ごとに移動して全体を学ぶ。10年くらいで全体を回ってから専門を決める。私は陸上、水泳、体操といったアマ技術種目を担当している。社内の他の部門への異動はほとんどない。しょっちゅう世界大会などに行かないといけないし、その余裕はない。

入社前に大学で体育を専攻していた学生は、1割くらいしかいない。大部分は、ソウル大、高麗大、延世大といった有名大学出身。専門は、新聞・放送や社会学、法学や外国語など。たいていは、研修として入社後に大学院に通いながら修士号までとる。

現時点で、KBSには24名のスポーツ記者がいる。そのうち4名が制作部。WCの前は15名くらいだったが、国際イベントを経るごとに少しずつ増えてきた。いちばん多かったときは28名いた。社内での位置づけとしては、報道局とスポーツ局という大きな区別があり、事業に似た特別な性格がある。テレビでは特に他の部門との差異はないが、新聞は日本の「体育会系」に似たイメージがあるかもしれない。特にスポーツ新聞は、スポーツと同時に芸能なども扱っている。最近では、ネットの影響が大きく、スポーツ記者連盟ができたが、その4区分（テレビ、一般紙、スポーツ紙、ネット）の一つになっている。相互の交流はあまりなく、特にテレビは排他的。新聞間の異動はかなりあるようだ。

スポーツ紙は扇情的な表現をよく使う。テレビには全然ないとはいえないが（「釣りをする」という）、公共放送なので言葉遣いには注意する。以前は、「太極戦士」「傭兵」「戦争」などを使っていたが、過激な表現、差別的な言葉遣い、外見を強調する表現はやめている。会社の方針を示すガイドラインがあり、それに沿っている。外来語もあまり使わないようにする。それでもKBSの番組のなかでいちばん感情的で扇情的な内容があらわれるのは、やはりスポーツだといえる。「雪辱」とか勝ち負けにこだわる表現が多い。最近でもよく使われるのは、「奇蹟」「夢」「偉大な挑戦」「伝説」など。

韓国にはスポーツを低く見る傾向が今でもある。昔は、貧しい人がスポーツ選手になった。運動ができれば、勉強ができなくても食べるもの着るものをすべて支援してもらえた。運動の経験の有無より有名大学の出身者がスポーツ記者になるのも、そういう風潮の一環といえる。視聴者からの反応のなかにも、卑しいスポーツごときにどうして長い時間を割いて報道する価値があるのかと、抗議が来ることがある。国民的な関心事だからと説明するが、批判する人には、年をとった人と女性が多い。入試中心の学生生活を送ってきたので、スポーツを経験したことのない人が多いのが背景。

文化とは経験することに意味があるとすれば、スポーツを見る視角としてもっともふさわしいのは、やはり文化だろう。昔は政治の道具だったし、今は商業主義的な部分が大きいが。最近では、家族で試合の見学に行くことが当たり前になったが、少し前まではなかなかない景色だった。

2002年のWCのときに大観衆が街頭応援にあらわれ、「大韓民国」を一緒に叫んだ。スポーツが自分たちの文化コードになった。日本の応援とも共通する部分が大きかった。一緒になってフェスティバルのようにその瞬間を楽しむという経験であり、そのとき民族や国家を身近に感じることも事実だが、民族主義とは少し違う。両国の若者が国境を越えた共通性を

感じる瞬間もあった。対抗戦をやるときは自分の側を応援するが、日本が別のチームとやるときは日本を応援する。日本が別のチームとやって負けてると、妙に気分が悪くなることもある。

昔と比べれば、国民はスポーツを見て楽しむことを覚えた。民族主義というよりは文化を経験し、楽しむこと。88オリンピックのときも大赤字だったが、これまで韓国はそういうことを気にせず国際大会を誘致してきた。しかし、ピョンチャンは収益を意識して開催する初めての大会になるだろう。

キム・ヨナのようなスターの存在は、韓国スポーツの特徴だといえる。天才が現れたとき、それを生かす人（教師、親）がまずいないといけない。次に、それを伝説にするメディアの役割が大きい。その過程でプレッシャーに負けて消えていく選手もいるが、勝ち残った選手がスターになる。スターになる前から、記者もその才能を認め、育てていく過程をずっと追っている。ちゃんとしたシステムとか、才能を発掘する機制があるわけではない。周りの視線によって育てられる。大会などで抜きん出た才能がいて、そこで国家代表になるチャンスを与え、ちょっとやってみようというやり方。とくにキム・ヨナはたまたま現れたスター。韓国のフィギュアは実績がないので、国家からの支援も期待できなかった。最初は母親が支え、スポンサーも自分で見つけた。そういう過程で国民の注目を集めてスターにするのがメディアの力。記者個人と選手個人との付き合いが基本にある。選手村では競技力の向上にしか神経を使わないので、スターはメディアが作るものという分業がある。現代スポーツは商業性が強いので、スターによって広告効果が生まれるというのもメディアにとって大きな要因だ。

メディアイベントとして消費されるスポーツは、距離を無化しつつ集団を「民族」として囲い込む効果をもっている。スポーツに特定の政治的メッセージを結びつけるのは、スポーツを取り巻くファンの行動様式や価値観、メディア、政策、歴史的経緯といった複合的な要因が絡み合って作用する「磁場」である。スポーツと政治を結びつける強力な力学が作用しているという意味において、韓国はSNの際立った場所である。このメカニズムをもう少し客観的に理解するためには、歴史的な次元に目をやる必要がある。

3. 脱植民地化とスポーツ政策の歴史

サッカー、野球、テニス、バレーボール、ラグビー、ゴルフ、陸上、水泳などの競技スポーツは、ほとんどが近代になってから「発明」され、イギリスを始めとする帝国主義の枠組みを通じて世界的な普及を遂げたことが知られている。韓国でも、スポーツの歴史は、すなわち植民地の歴史でもある*⁵。そしてスポーツは、支配者に同じ土俵で挑戦できる希有な舞台を提供した。とくにサッカーと野球の対日本戦は、朝鮮の民衆にとって民族の底力や栄光を証明するための仮想闘技場の役割を担った。仮想の闘技場であるにとどまらず、植民地時代の日朝戦は、しばしば本当の「集団乱闘劇」を引き起こすきっかけを提供した*⁶。

植民地時代から解放後しばらく経っても、スポーツは日常的になじみの薄い外来の制度であり、肉体労働を蔑視し知性主義を尊ぶ儒教的伝統にとって異質な実践であり続けた。さらに、植民地時代に持ち込まれたスポーツとは、まず近代的な身体規律を植え込む学校体育であり、軍国主義に裏

打ちされた勝利主義的な色彩の濃厚なものだった。支配者を模倣しつつ、やがては支配者を打ち負かすことまで実現できるのがスポーツというものの特徴的な一面であるが、植民地時代を通じてなによりそうした闘争としてのスポーツ像を人々は内面化していった。もちろん、スポーツが徐々に社会に浸透していくにつれ、公正な競争や平等な関係性を広げていく契機になったし、女性の社会的進出を促進する面もあった。しかし、そうした内発的な近代化・文明化といった側面よりは、外部や権力がもたらした他律的な競合意識の過熱化のほうが目立った傾向だったといえる。

解放後の権威主義的体制は、スポーツのそうした勝利主義的イメージと政治的役割をよりいっそう堅固なものにすることに「成功」した。李承晩大統領の時代（1948～60）は、文人意識の優越からスポーツの普及にたいして政府はきわめて消極的であった。一方で、植民地時代の残滓としての軍国主義的で勝利主義的なスポーツ文化が幅をきかせていた。とりわけ国際試合で日本に打ち克つことは、民族的プライドの大いなる源泉となった。1953年に解放後初めてサッカーの選手団を日本に送り出すに際し、李大統領が「もし負けたら、玄界灘に身を投げろ」と「激励」した有名なエピソードは、スポーツが政治的道具の位置しか与えられていなかったことを雄弁に語っている。一握りのスポーツエリートが国家の命運をかけて奮闘し、大部分の大衆はスポーツを経験したこともないまま自国チームの勝敗に一喜一憂する立場にとどまっていた。

朴正熙政権（1961～80）においてもそうした構図に大きな変化はなかったが、文弱な儒教的伝統を嫌った軍人として、朴大統領はスポーツに尚武の精神と社会的統合の機能を積極的に見出した。「体力は国力」をスローガンに、スポーツを通じて国威発揚を図った。東京オリンピック（1964）に刺激を受け、スポーツ選手村の設立、年金制度などを整え、政策的にスポーツエリートの養成を始めたのがこの時期である。北朝鮮との対立が激化するなかで、スポーツは「戦争」だという受け止め方が社会に浸透した。経済成長とともに政府のスポーツ支援も進み、体育教育が浸透したのもこの時期だが、スポーツを「やるエリート」と「見る大衆」との大きなギャップは依然として埋まらなかった。

全斗煥政権（1980～88）は、「スポーツ立国」をスローガンに国威発揚の手段としてスポーツの位置をさらに高みへと押し上げた。盧泰愚政権（1988～93）が挙行した1988年のソウルオリンピックは、軍事政権時代におけるスポーツ政策の総決算であった。オリンピックを成功裏に開催し、韓国人選手が華々しく活躍する姿は、北朝鮮にたいする圧倒的な優位を印象づけ、さらに日本をも凌駕する成績を上げることで、SNの「成功」を全国民に強く印象づけることになった。一方で、ボクシング（1962）とゴルフ（1968）を除いて国内にプロスポーツがなかった韓国だが、野球（1982）、サッカー（1983）、相撲（1986）がこの時期にプロ化を果たした。政策が先走るあまり、国際競技（とくに日韓戦）に比べると盛りあがり欠ける時期がその後かなり続くことになるが、それでもスポーツが社会全体に普及する傾向がこの時期に加速化する。

スポーツはその後、経済成長と1980年代末に始まった民主化のプロセスによって大衆化していく。しかし、ソウルオリンピックでの成功体験は、引き続き韓国の政策を決定づけ、また国民の期待値も下がることはなかった。軍事的な背景をもつ勝利主義と国民の一体感がもたらす陶醉への希求は、その後の政権でも醒めることがなかったように見える。一例だけ挙げると、2002年のワールドカップ日韓共催で韓国チームが四強進出を決めたとき、民主化のシンボリック存在である金大中大統領は、興奮を抑えきれず「壇君以来でもっとも幸福な日」と表現した（Asia Times Online, June 25,

2002)。国民の圧倒的多数もこのとき強い自負心を感じ、識者は今回の経験によって日本や先進国にたいする「敗北主義」を克服することができたと強調した。

以上のような歴史的流れを通じ、韓国のスポーツ政策の特徴は、エリート主義であり、「選択と集中」をキーワードとする戦略だと要約できる。政府からスポーツ政策に関する開発計画と諮問を受ける立場にある体育科学研究院政策開発研究室のイ・ヨンシク氏によれば、トップダウン式で統合的な国家戦略とエリート選手養成に特化された制度と組織がその内実ということになる。体育科学研究院の複数の専門家にたいするインタビューに主に依拠しながら、その概略について、1) 国家組織、2) 地域組織、3) 選手村、という3つのレベルで整理しておこう。

1) 国家組織

1968年に大韓体育会と大韓オリンピック委員会が統合され、スポーツの国家管理が一元化される。大韓体育会はエリート選手育成と生活体育の両方を管轄していたが、実際にはエリート養成に傾注し、生活体育を受け持つ機関は長い間不在のままであった。民主化以降の1989年に国民生活体育会がつくられ、ようやく生活体育を取り扱う機関が生まれた。2003年にはまた昔のように両者を再統合する試みが始まったが、うまくいっていない。1988年のソウルオリンピックの成功により、大韓体育会はエリート養成こそが国民の期待に応える役割だと考えているからだ。また他方で、国民一般がスポーツに関心をもつようになり、生活体育を推進する機関が必要とされている現実も無視できない。

2) 地域組織

国家のスポーツ政策を地域レベルで実現するための制度として、学校スポーツと実業界スポーツがある。学校では、早い段階から才能のある子どもを選抜し、特別な養成をおこなう。最も早い段階の選抜は、「体育英才」と呼ばれ、小学校2年のときに体育人材育成団体が全国の学校で選抜をおこない、大学の「英才センター」で育成する。その後、各種の競技団体などで選抜されたエリートは、年齢別に「夢の木（小5～中2）」、「青少年代表（中3～高1）」、「候補選手（高2～大1）」と呼ばれ、最終的に「国家代表（年齢無関係）」になる。彼らはすべて学校の部活に所属して日常的な訓練を積み重ね、学期休みに集まって20日間の集中訓練を年に2回おこなう。国家代表は選手村に集まり、年に200日以上以上の訓練をする。

逆にいうと、そうしたスポーツエリートに選抜されない一般の子どもは、成人するまで日常的にスポーツをする習慣が与えられないことになる。授業で体育のコマがあるところも、実際には自習したり受験勉強に費やす例が多い。ほとんどの学生は勉強ばかりして体を動かさず、一部のエリートはスポーツばかりして勉強をまったくしないといういびつな現実がある。これに対してはさまざまな批判もあり、是正の試みも始まっている。

韓国の実業界スポーツには、企業型、公共機関型（公団、財団）、地方自治体型という3種類があり、大学に進学しなかった者や、卒業後の選手のための受け皿になっている。女子サッカー、自転車競技、ボートなど比較的マイナーな種目が多い。160の公共機関のうち30%が関わっている。いちばん数が多いのは地方自治体で、全体の6割を占めている。企業は財政が悪化するとやめてしまうので、このシステムを維持するためにも自治体の役割は大きい。これらは大韓体育会と連携し、

やはりあくまでエリート養成を目的としている。自治体に属するが、選手は普段から仕事はしないで訓練だけし、選手をやめたら退職する。グレードによって年俵は国際大会メダル級が3~4千万ウォン、その下が1.5~2千万ウォンくらい。優秀な選手は、スカウトにより地域を変えることも可能。学生を対象にしたシステムとは別物で、この中から国家代表になる道がある。日本より競技力が高くなる一つの要因は、このシステムにあるとあってよい。市道の長が同時に市道の国民生活体育会の会長になり、市道間の競争を維持させながら発展していくやり方である。

3) 選手村

1966年に政府の肝いりでソウル近郊の泰陵^{テリョン}に設立された。広大な敷地には、競技種目別の体育館、水泳場、スケート場、陸上トラック、宿泊所、医療施設、食堂、会議室などが完備されている。44種目の選手1,400名近くが登録されているが、一時に入村できるのは480名くらいである。生活しながら科学的な訓練に集中できる空間であり、スポーツに関する施設はもちろん、カラオケや宗教施設まで併設されている。現在はここ以外にも、高地訓練用の江原道太白^{テペク}選手村（1997年設立）があり、また忠清北道鎮川^{チンチョン}国家代表総合訓練院が2008年に着工されている。

大韓体育会選手村が出している『選手村案内書』という小冊子には、選手村の主要機能として、「スポーツを通じた国威宣揚によって国民の期待の実現と国家発展に寄与」することがはっきり謳われている。週末や休日を除き、年に220~240日くらいの訓練を積み重ねる。体力増強や基礎トレーニングが中心になる。学生の場合、午前中は学校に通い、午後から訓練をおこなう。ソウルに家がある場合は、自分の所属する学校に通うが、地方出身者の場合は近所の学校と協定を結んで教育を委託している。もちろんそれだけでは十分とはいえず、社会的には色々な批判もある。引退後のキャリアを考える部署も最近できたばかり。ただし現在の選手村には、体操や水泳などごく一部の競技を除いて中高生はいない。

選手村に入れば、バランスのとれた食事、訓練器具、コーチ、医療サービスなど必要なものがすべてそろっており、最近は多少の手当まで支給される。全種目の選手が集まって集中的に訓練できるので、競争心や団結心が生まれる。個人的理由で入村しないトップアスリートもごく一部にいるが、大部分の選手はここに入ることを希望する。ただし、野球やサッカーのようなプロリーグがある競技は、選手村とは独立して訓練を続ける。

選手村のすぐ隣に体育科学研究院があり、そこの連携も重要な役割を果たしている。国家代表のコーチと監督は指導者としての1級資格が求められるが、そのために体育科学研究院で研修を受けないといけない。結果として体育科学研究院の研究員とコーチは、師弟関係になる。昔は両者が水平関係だったので、提言してもいうことを聞かなかった。10年くらい前からこの制度を作り、両者の関係が近づき、競技力の分析や心理的判断をもとにした強化がうまくいくようになったという。これもまた、日本にはない韓国の強みだといえる。

4. 儀礼性とSN

韓国におけるSNは、国家イデオロギー（反共、反日）と一体化した政策的勝利主義が演出してきたものであり、国家と地域が手を組みながら重点的な戦略をトップダウン式の制度や組織を通じて実現してきた。メダリストの兵役免除、年金制度、大学入学枠のスポーツ特待生制度といった報

奨制度に動機づけられ、国際ゲームで見事なパフォーマンスを見せるトップアスリートたちの活躍は、国民統合に多くの貢献をしてきた。一方で、街頭応援に代表されるような下からの国民感情の発露も、韓国のSNを特徴づけている。両者が合体することで、韓国らしいSNの情景が展開することになる。こうして、韓国ではとくに国際舞台における競技スポーツの行方に、過剰な政治的・社会的意味を読み込む習性が根付くことになった。とくに有名な国際大会における日韓戦は、今でも国内リーグ戦では想像もできないような大きな盛り上がりを見せる。そのたびに、メディアも大騒ぎを繰り返し、称賛と絶望をせわしく往復する大げさな表現がテレビや活字メディアに乱舞する。しかし、そうした現象を反省的に捉えなおす言葉も最近は例外でなくなりつつある。とりわけ、スポーツ社会学の専門家をはじめとする知識人は、一般に自国の熱狂状態に批判的な目を向ける傾向が強い。なかでも、東亜大学のチョン・ヒジュンは、脱植民地化の過程で韓国のスポーツは開発独裁体制と一体化した制度に貶められてきたと、厳しく批判している*7。

韓国の民族主義がスポーツを通じて爆発する歴史的要因として、力にたいする執着と集団主義にたいする強迫、そして内面化された西欧コンプレックスがあり、さらにもう一つ追加するなら、韓国社会に受け継がれてきた不安と恐怖があるだろう。…自分の不安な現実を打倒することができ、とくに次第に個人主義化し自分の所属する共同体を求めがたい韓国社会の現実において、「一緒に」喜び熱狂し祝福することのできるメディアはひとえにスポーツだけだ。

最近では、メディアにも批判的な論調が目立つようになっている。たとえば、『週刊韓国』（2009年3月30日号）は、先述したWBCの狂乱を踏まえ、「スポーツ、愛国心に火をつける」と題する批判的・分析的な記事を出した。

それによれば、韓国で「スポーツがまるで国民感情の温度計になるくらい切実なのは、競技それ自体よりは中継するメディアのためではなかろうか」という。キャスターや解説者の表現は、視聴者がゲームに感情移入するための「刺激剤」となり、ナショナリスティックな反応を増幅させる。それらが渾然一体となって演出されるメディアイベントこそが、SNの実体なのかもしれない。そうした集団感情の源泉には、植民地時代の屈辱の記憶や開発独裁体制によって植え込まれたイデオロギーがある。歴史的な背景を重んじる限り、スポーツは「単なる」スポーツでなくなる。

韓国の国民は、国際スポーツ大会で韓国の選手が善戦して金メダルを取ったりいい成績を上げると、これを過去の歴史的悲しみに対する補償であり、未来の国運の徴候として受け取る場合が多い。…韓国人にとってスポーツは単純な娯楽ではない。それは、国家の運命と民族の未来がかかった荘厳な殉教者の儀式だ。

一方で、選手はつかの間の栄光を求めて必死の訓練を積み重ねるが、国威発揚のドラマが過ぎ去るとあっさり忘れ去られる。特定の競技能力だけに特化して育成されたトップアスリートのことを「運動機械」と皮肉の向きもあるが、そうした人権無視の体制がいつまで続けられるか、社会の成熟化とともに韓国のSNは今過渡期にあるといつてよい。

問題は、スポーツをスポーツとして捉える立場と、それを民族や国家という「大きな物語」の一部として捉える立場との対立にある。しかし、人間のコミュニケーションに見られるそうした「飛躍」は、スポーツをナショナリズムに結びつけるとともに、同時にそこからずれた広がりを用意することもある。膨大な人波が交通を遮断し、首都の中心部を覆いつくす光景は、もはや政治的意味を超え、祝祭や祭儀と呼ぶほうがずっと真実に近いのではなかろうか。同じ記事には、こういう表現も見られる。

スポーツは民族の抑圧の恨を晴らしてくれる「シッキム・クツ」であり、国家の経済的繁栄を確認させてくれる「ビョルシン・クツ」である。

クツとは伝統的なシャーマニズム儀礼であり、「シッキム・クツ」は死霊の恨を晴らしてあの世に送る祭儀、「ビョルシン・クツ」は豊穡を祈念する祭儀を指している。こういう表現を、単なる比喻でなく、最も真実に近い陳述として受け取るべきではなかろうか。韓国文化の特徴をシャーマニズムに還元するとしたら紋切り型にしかないであろうが、そうした「色合い」をバランスよく捉えることは、文化の理解にとって大切な部分を占める。

L・ケンダルは韓国のシャーマニズムを長年研究してきた文化人類学者だが、近著『シャーマン、ノスタルジア、IMF』では金融危機に代表されるグローバル化の進行にもかかわらず、韓国ではシャーマニズムが依然として大きな役割を果たしていることをフィールドワークに基づき綿密に記述している*8。

たとえば、あるシャーマンの言葉から本書の叙述は始まるのだが、それによれば韓国ではシャーマンの数は昔よりむしろ増えているという。なぜなら、朝鮮戦争で山が焼けたり、開発政策で道路やアパートを造るために山が切り崩されたりといったことが繰り返され、「山神」の行き場がなくなったから。山は靈感を失い、山神は居場所を求め、昔よりもっと簡単に人間に「降りる」ようになったのだという。

山が荒れたため神がいなくなるのではなく、むしろもっと人間に近づくようになったという解釈は、とても独特な物語に思える。こうして、山の衰退とともに靈感を弱めた神は、手近なよりしろを求めて誰彼かまわず降神する。昔はシャーマンを探し当てるのが大変だったが、今ではむしろどこにでもいるようになった。希薄化の過程を伴いながら、シャーマニズムが韓国社会に蔓延することになったのである。

一方で経済的なグローバル化の進行は、シャーマニズムを衰退させるどころか、それにたいする需要をむしろ高めることになった。IMF危機のときも、リストラされたビジネスマンや倒産した自営業者を含め、多くの人々がシャーマンの託宣を聞こうと集まった。ケンダルによれば、韓国の事例は、資本主義の発達が合理化や呪術の衰退に向かうというウェーバー的なテーゼに真っ向から刃向かうものだという。

こうした解釈を社会のどのレベルまで押し広げていけるかどうかは議論の分かれるところであるが、ここで素描したような傾向が韓国文化の一面を特徴づけていることは否定できない。集団祭儀によって神がかった熱狂状態を好んでつくり出し、そうした儀礼的仕掛けによって社会や宇宙の禍福を支配しようとする。韓国に限らず、人間は経済的合理性だけで生きているのではなく、非合

理な消尽や恍惚を通じて日常的制限から解放されたいとどこかで願っている。ただし、その程度や色合いには明らかに個人的・集団的の違いがあり、たとえば今日の日本でどれほど熱狂が高まっても韓国の街頭応援のレベルに達することはまずない。そういう違いを認めながら、それはそれだけのことだという識見も捨てるべきではなかろう。

換言するなら、自国チームの活躍に一喜一憂する群集は、非日常的な枠組みのなかで祝祭的な恍惚に我を忘れていたのであり、必ずしも何らかの政治的メッセージを発しているわけでもなければ、民族主義的な狂気に没入しているわけでもない。ただ、祝祭的な熱狂とSNは二者択一的な関係にあるわけではなく、むしろ相互強化的な補完関係にあるといったほうが正確かもしれない。その点で、ブラジル社会におけるサッカーと祝祭性との関係を追究したダ・マータの次のような言葉は示唆的である*9。

フットボール競技に付随して発生する市民的カーニバルのひと時において、ブラジルで通常その使用が規制されているすべての神聖な国家的象徴は、社会的、政治的な支配階級の代表者たちの専有物であることをやめ、それらの象徴とのあけっぴろげで束縛されない親密な関係を祝う無名の大衆たちによって共有されるのである。

ブラジル社会のように、極度に階級的な社会環境においては、フットボール（そして、カーニバルのような他のレクリエーション活動、ある種の大衆宗教の形態）によって創り出される〈時空〉は、私的な人間関係の網目を損なうことなく、誰でもがすべての能力と弱点を含めて、ありのままの自己を晒け出すことができる、個性的で自由な表現の存在の可能性を提示する。

韓国社会の特徴とスポーツイベントを通じた集団的熱狂がどのように相関しているかの分析は、まだこれからの課題である。とはいえ、問いを発することは許されよう。大衆的な祝祭となったスポーツイベントの祭壇に位置する巨大スクリーンには、何が映し出されているだろうか？それは依然として、民族という名の神であろうか？あるいは、非日常的な興奮と快感と友愛であろうか？グローバル化によってすでに空気が支配している韓国社会にとって、これは幻想に過ぎないであろうか、あるいはこれこそが日常的苦難の末に手にすることのできるわずかな栄光というものであろうか。

5. 結語

現代社会におけるスポーツの役割を考えると、忘れてならないのはビジネスという視点である。スポーツが国際的な注目を集める祭典となり、ナショナリズムをかき立てる過程は、スポーツが国境を越えた人材の移動と巨大資本が支配する国際ビジネスになっていく過程と重なっている。『週刊東洋経済』2010年5月15日号の特集によれば、世界のスポーツビジネスは今や10兆円に迫る市場規模を誇るという。トップアスリートは高額な契約で世界中を移動し、サッカーのチャンピオンズリーグ、アメフトのスーパーボウル、テニスのウィンブルドン、ゴルフのマスターズといった主要なスポーツイベントは世界中で放映され、あらゆる人種と民族の格闘が見られる（種目ごとにかな

りの偏りがあるが)。オリンピック、WBC、WCといった4年ごとの特別なイベントにとどまらず、すでに日常的にそうした国際スポーツイベントにさらされているので、自国の選手に特別な関心が向けられる傾向が消えないとしても、ファンの意識も国境を越えざるを得なくなる。

こうした同時代の環境のなかで、韓国のSNはどのような「成長」を遂げていくだろうか。それにたいして明確な答を与える準備はまだないが、SNを比較的な視点から追究するときの基本的な見取り図を最後にまとめておこう。

一方には、道具主義的な立場と呼べる見方がある。スポーツの意味を社会的功利や効用からはかる立場であり、スポーツを政治的道具として利用してきた韓国のSNは、基本的にこの立場から理解することができる。あるいは、スポーツをビジネスや金儲けの手段としてみる近年の傾向もここに含まれよう。こうした観点からのスポーツは、あくまで別の目的の手段や道具の位置にとどまるが、その重要性や社会的注目度が増すにつれ、別の観点を要求するようになる。

もう一方で、本質主義的な立場と呼べる見方がある。スポーツの意味をそれ自体の魅力からはかろうとする立場であり、韓国のメディアにも最近では勝敗だけにこだわらないスポーツ批評が育ちつつある。そのために、隣接領域との関連からスポーツ独自の意味と魅力を明らかにすることがさらに必要となろう。その意味で、祝祭（儀礼）との関連に注目したが、最後にアートとの類縁性に触れて本稿を閉じよう。

ドイツの美学研究者のW.ヴェルシュは、スポーツが一種のアートであると主張し、注目を集めたことがある*¹⁰。このテーゼを理解するためには、一方でアートの概念が拡がり生活に浸透しつつある過程があり、他方でスポーツが勝利への執着やルールの拘束を離れた即興的なパフォーマンスとして大衆的に楽しまれている現実を踏まえる必要がある。そして、スポーツをそのような視点から見ると抵抗があるのは、抜き差しならぬ偏見がまだ社会と研究者の側に残っているからだという。

スポーツの喜びは、低級で大衆的な喜びであり、美学によって積極的に考察するに値しないと思われる。しかし、スポーツの芸術的性格を無視することで、それが大衆にとってなぜこれほど魅力的かという事実を理解し損なっている。

ここではこうした主張を本格的に検討する余裕はないが、これからのスポーツのあり方を考えるときに、一つの重要な視点を提供していると評価することができる。一方で政治やビジネスに引き込まれながら、もう一方で祝祭やアートとしての役割も無視できなくなっている今日、韓国、そして東アジアのSNはどのような成長を遂げるであろうか。その比較の端緒によろやく辿り着けたところで本稿を閉じることにする。

* 1 ナショナリズムに関する研究は膨大であるが、それらは一般に言説を通じた分析に重きが置かれており、スポーツを含む身体活動との関係については十分追究されていない。言説と社会・意識・身体を貫く広がりからスポーツを捉え直す研究には、学際的で新しい問題領域が広がっている (Tomlinson, A. and Young, C. eds. *National Identity and Global Sports Events: Culture, Politics, And Spectacle in the Olympics And the Football World Cup*.)

State Univ of New York Pr, 2006)。日本では『スポーツナショナリズム』（中村敏雄他編、大修館書店、1978）という先駆的な書物があるが、内容は日本と欧米との対比が中心であり、社会科学的な問題提起もなされないまま、この課題は後に受け継がれ発展させられなかった。グローバル化が進行し、中韓のようなアジア勢力の台頭を前提とした現代を対象にするには、多くの面で議論のアップデートが必要になる。本稿の基礎に、試論として問うた拙稿がある（『スポーツ・ナショナリズムと韓国社会の明日』『変わる韓国、変わらない韓国』洋泉社、2004、29-56）。

- * 2 本稿の一部は、科研費基盤研究(C)「東アジアのスポーツ・ナショナリズム——国家戦略としての有効性と国際協調の展望」(平成23～25年度)による研究成果に負っている。とりわけ、2011年8月末～9月初旬に実施した調査研究では、体育科学研究院のイ・ヨンシク博士、コ・ウナ博士、選手村イ・オッキュ訓練企画チーム次長、ソウル大学体育研究科クォン・スニョン教授、大韓ヨット協会オ・ジョンソク理事など、多くの関係者にインタビュー調査を実施し、貴重な知見を得ることができた。記して感謝したい。
- * 3 B. アンダーソン『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社、2005。
- * 4 しかし、そうした現象を批判的に捉える見方も一方にある。森津千尋によれば、日韓の識者に見られたレッド・デビル賛美の声は、このマスセレモニーが企業のマーケティング戦略によって産み出されたメディアイベントである点を見逃しているという。実際、この時の街頭応援は、SKテレコムという韓国の代表的な携帯電話会社が応援の作法を繰り返しテレビのCFで広め、徹底した戦略で動員を仕掛けたことが知られている。森津千尋「メディアイベントとしての街頭応援」、牛木素吉郎・黒田勇編『ワールドカップのメディア学』三水舎、2003、123-146。
- * 5 ゲットマン、アレン『スポーツと帝国——近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂、1997。
- * 6 解放後の韓国のスポーツ政策をまとめるには、特に次の文献が役に立った。大島裕史「コリアンスポーツ<克日>戦争」新潮社、2008。Gwang Ok. *Transformation of Modern Korean Sport: Imperialism, Nationalism, Globalization*. Hollym Intl, 2007.
- * 7 정희준, [몸, 이데올로기 그리고 민족: 한국 스포츠민족주의 이해 (体, イデオロギー、そして民族:韓国スポーツ民族主義の理解)]. 2010 한국스포츠사회학회 정기학술대회지, 3-18.
- * 8 Kendall, Laurel. *Shamans, Nostalgias, and the IMF: South Korean Popular Religion in Motion*. U. of Hawaii Press, 2009.
- * 9 ダ・マータ「社会の内なるスポーツ——国民劇・国民祭としてのフットボール」、V・ターナー、山口昌男編『見世物の人類学』三省堂、1983、246-287。
- * 10 Wolfgang Welsch “Sport-Viewed Aesthetically, and even as Art?” A. Light and J. M. Smith eds. *The Aesthetics of Everyday Life*. Colombia UP, 2005, 135-155.